

Fig.2 対象者の攻撃的行動の推移

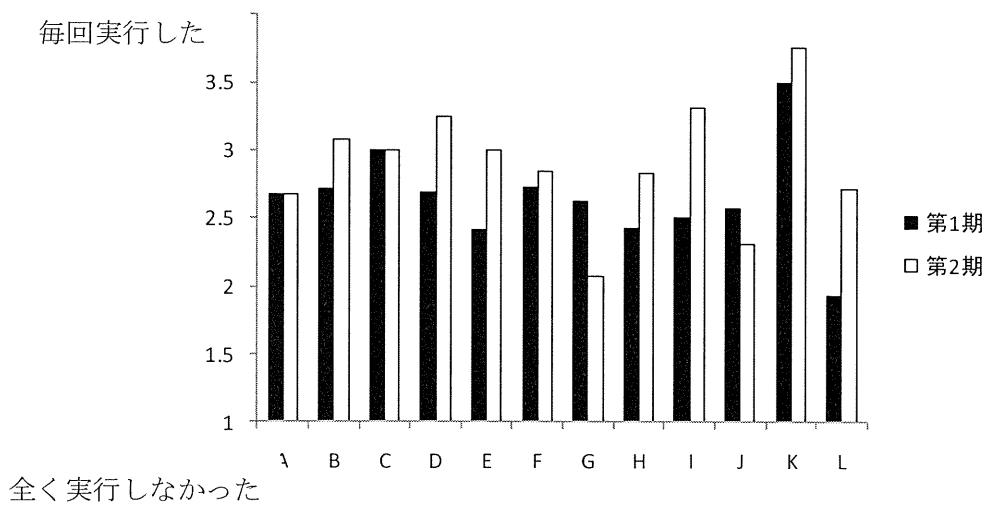


Fig.3 第一次および第二次行動支援計画 職員 における職員ごとの評価

とても効果があった

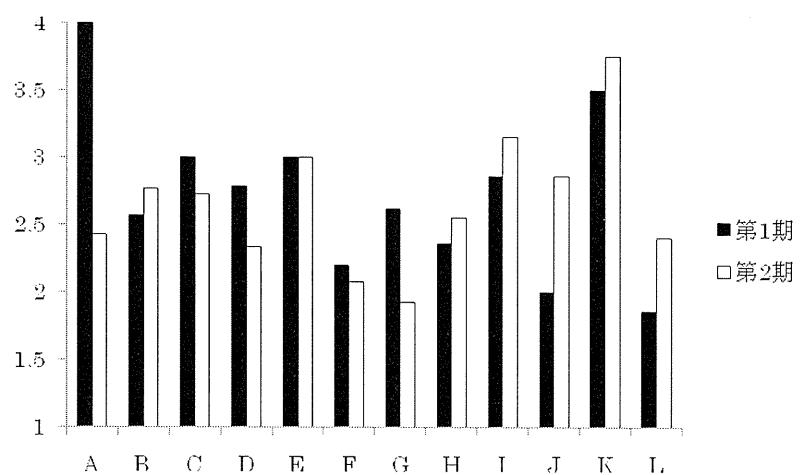


Fig.4 第一次および第二次行動支援計画 職員 における職員ごとの評価

## 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)

主任研究者 井上雅彦

### 分担研究報告書

#### F市における強度行動障がいの支援者育成を目的とした実践研修 『行動障がい支援研修』の取り組み

分担研究者 櫻井みどり（社会福祉法人福岡市社会福祉事業団ももち福祉プラザ）  
倉光晃子（西南女学院大学短期大学部）  
野口幸弘（西南学院大学人間科学部）

#### 研究要旨

本研究では、F市におけるF市における強度行動障がいの支援者育成を目的とした実践研修である『行動障がい支援研修』の取り組みにおける受講者の研修効果について検討することを目的とした。本研修には、F市内の障がい者施設・事業所職員、居宅支援事業所ヘルパー、特別支援学校教員等の16名の受講者が参加した。3日間にわたって実施された本研修の内容は、行動障がいの支援に関する講義、グループ演習、行動障がいを有する協力者に対する支援計画ミーティング、協力者に対する実習といったプログラムで構成された。本研修の終了後に受講者から提出された実習報告書における支援内容と課題点の記述と、協力者の行動問題と活動従事の状況に関する記述から、受講者に対する本研修の成果を整理した。その結果、行動問題予防の先行子操作と行動問題の対応法、適切行動の先行子操作に関する支援内容は多く実践されていたが、適切行動の対応法については提案も少なく、十分に実践されていないことが明らかとなった。また、協力者の実習時の状況については、協力者によって行動問題や活動従事の状況に大きな差が見られた。本研修の今後の課題として、行動問題の軽減と適切行動の形成の直接的支援技法の獲得に有効な講義内容や演習展開、実習協力者の選定等再検討する必要がある。

#### A. 研究目的

F市では、平成18年度から福祉サービス対象者の障害特性の理解と支援の視点の共有化、支援技術の向上を目的に『行動障がい支援研修』という実践研修を行つ

てきた。

この研修を主催する『福岡市強度行動障がい者支援調査研究会』は、平成17年にF県内で起きた知的障がい者入所施設職員による行動障がいを有する利用者へ

の虐待事件をきっかけに、強度行動障がいの調査や研究を行うことを目的に平成18年5月に発足した。F市内からその施設に我が子を入所させている家族からF市長へ、市内の重度行動障がい者を受け入れる入所施設の整備と、自閉症、知的障がい、行動障がいに対する専門性を有した人材育成機関の設置等を要望する陳情があり、市議会でも取り上げられたことから、強度行動障がいの実態調査を行うとともに、支援者養成を目的とした本研修を開始した。

本研究では、この『行動障がい支援研修』の内容を取り上げ、本研修の受講者に対する研修効果について検討する。

## B. 研究方法

### 1) 『行動障がい支援研修』の受講者

F市内の障がい者施設・事業所職員（入所・通所）、居宅支援事業所ヘルパー、特別支援学校教員等16名の受講者が参加した。

### 2) 『行動障がい支援研修』における指導・助言者

第三筆者である行動障がい支援の専門家が本研修における総括指導助言者を務めた。

また、本研修における講義の講師、演習トレーナー、実習トレーナーを、市内の各事業所等で発達障がいの専門性と経験を有し、行動障がい支援に取り組んでいる職員が担当した。

### 3) 『行動障がい支援研修』の研修プログラム内容

平成23年度の本研修の期間は、7月29～31日の3日間で実施された。

研修内容は、1グループ受講者4名の4グループ体制で、1日目は講義と演習、2日目は支援計画グループミーティング、3日目は実

習、全体ミーティングといったプログラムで構成された。

1日目の講義では、「行動障がいとは何か、アセスメントの方法（文書・インタビュー・直接観察等について）、行動上の問題の背景にある問題について、行動問題を理解するための機能的アセスメント、支援上の留意点等について解説した。演習では、行動障がいのある事例を文書資料とビデオで提示し、各グループで状態像を理解し、それに合わせた支援内容や支援方法について協議して支援のシミュレーション発表を行い、演習トレーナーによる発表へのフィードバックを受け、講義内容を復習した。

2日目の支援計画グループミーティングでは、3日目の実習準備を行った。3日目に各グループの実習に入つもらう行動障がいを有する協力者の事前調査票と、活動ビデオ、家族からの直接情報等を基に、協力者の状態像を把握し、環境の整備、活動スケジュールや課題の検討、支援者の関わり方などを各グループで協議し、実習での活動を組み立てる作業を行った。また、協力者の行動問題の機能的アセスメントを行い、想定される先行事象、結果事象、望ましい行動、代替行動の選定についても協議し、仮説を立てて対応方法を検討した。

3日目は、各グループに分かれて、行動障がいを有する協力者への支援実習を実施した。協力者の行動観察を行い、アセスメントをして、状況に応じた環境設定の修正・変更、活動内容の修正・変更、具体的な対応方法、支援ツールの作成、行動問題への対処方法など、グループで協議しながら、また、実習トレーナーの指導助言を受けながら実習を進めた。実習終了後は、各グル

ープで振り返りを行い、その後の全体ミーティングでは各グループの振り返りの内容を発表し、反省点をあげた。最後に、第三筆者である総括指導助言者のまとめの講義を行い、支援者としての在り方について指導・助言した。

また、この研修において行動障がいを有する協力者の支援課題が明確になるため、研修の受講者と協力者との在籍している施設、地域生活支援で関わっている相談事業所、居宅支援事業所等の職員が集まってのケア会議の計画が動き出すように工夫・配慮した。

### C. 本研修の成果

本研修終了後、全受講者に研修3日目の実習報告書の提出を依頼した。その報告書の記述事項全7項目（①協力者の状態像、②支援概要：行動問題・適切行動の環境設定、対応等、③アセスメント情報から行動問題の起りやすい場面と効果的な対応、④実習中の行動問題の生起、活動従事の様子、⑤行動問題に関連する事項：睡眠状況、服薬、環境要因等、⑥支援の成果と反省点、⑦研修のまとめ：感想）のうち、②支援概要、③アセスメント情報から行動問題の起りやすい場面と効果的な対応、④実習中の行動問題の生起、活動従事の様子、⑥支援の成果と反省点、⑦研修のまとめ：感想の5項目に注目し、研修内容が実習時の支援計画・実践に生かされているかを検討した。

#### 1) 実習報告書における実習時の支援内容

と課題点に関する記述事項の推移

16名の受講者中提出された15名の実習報告書の②支援概要、③アセスメント情報

から行動問題の起りやすい場面と効果的な対応、⑥支援の成果と反省点、⑦研修のまとめ：感想の4つの記述事項の記述内容を、行動問題の先行子操作、結果操作、対応の課題点、適切行動の先行子操作、結果操作、支援の課題点の6点で整理したものをTable 1に示した。

行動問題の支援に関する記述については、行動問題が生じた場合の対応法の記述が各受講者において1点以上明記されていた。各協力者の学校、サービス事業所、家庭といった生活場面での状況、情報を把握した上で対応が検討されていた。行動問題の対応に関する課題点として、パニック時の対応、情緒不安定時の本人の発言に対する分化強化の仕方、不適切行動が起りやすい場面の配慮の検討などがあげられていた。

実習報告書の記述事項で多く明記されていた事項は、適切行動の先行子操作についての記述で、特に活動スケジュールとそれを従事できる環境の構造化、指示カードや手順書などの支援ツールの提示といった記述が充実している傾向が見られた。一方で、適切行動の対応（強化）方法が明確に記述されていなかった。適切行動の支援における課題点として、スケジュール変更の伝え方、スケジュールや指示カードの提示の仕方、活動のメリハリや構成（休憩や好きな活動を行える時間の配分）などがあげられていた。

#### 2) 実習時の実習協力者の活動従事と行動問題の生起の状況

16名の受講者中提出された15名の実習報告書の④実習中の行動問題の生起、活動従事の様子の記述事項の記述内容から、実

習時における各グループの協力者の活動従事と行動問題の生起の状況整理したものをTable 2に示した。

協力者にとって実習を行う場所が慣れない場所であり、受講者も協力者と対面することが当日初めてで、臨機応変の対応が必要とされることもあったが、各グループで計画していた活動が実施できたグループがほとんどであった。全協力者が何らかの行動障がいを有する方々であるため、行動問題が生起する場面が数場面あったが4グループ中3グループについては活動従事が不可能となる程の大きな行動問題が生じることはなかった。ただ、グループ2の協力者は、環境の変化に過敏で、不安な環境において大声や他害行動が生起する特徴があり、今回は新奇場面で計画していた活動に従事することではなく、落ち着いていられることに目標を変更せざるを得なかった。

#### D. 考察

これらの研修成果から、本研修の受講者が行動障がいに対する支援の知識や技術を習得できるような研修内容にするには、行動問題の軽減と適切行動の形成の直接的支援技法の獲得に有効な講義内容や演習展開、協力者の選定等再検討する必要があることが示唆された。

この5年間実施してきた本研修の成果としては、研修内容の厳密性についてはまだ弱いものがあるが、本研修を受講した職員を中心に、個人的あるいは一事業所、一支援機関で抱えこまことに複数の支援者や事業所、機関で役割分担をする取り組みが広がり、日常的な協働支援ネットワークの

構築が進んだ。平成21年度から、強度行動障がい者優先の日中一時支援・短期入所事業所が開設され、また、ボランティアで支えていた各事業所間の共同支援を、福岡市が「強度行動障がい支援モデル事業」として、共同支援を支える派遣職員への公費導入の予算化が実施された。支援の形が見える形となり、各行動障がい事例のケース会議を開いて、きめ細かな議論を重ねている。

本研修の今後の課題としては 3日間の研修内容が多く、受講者によっては十分な知識・技術が習得できない状況もあるため、受講者にとって効率的なプログラムの組み立てを再検討する必要がある。その中で、行動障がいの対応の要となる機能分析的アプローチの習得に焦点を当てた講義内容を組み込む点も検討すべき課題と示唆される。そして、受講者の講義の習得と受実習における実践及び協力者の行動面の状態との関連性の検証や、受講者が習得した支援知識・技法を各所属での実践に生かされているかの検証をすることが必要とされる。

#### E. 参考文献

櫻井みどり・倉光晃子（2011）福岡市における『行動障がい支援研修』の取り組み。強度行動障害に対するスタッフトレーニングとコンサルテーションの効果。日本行動分析学会第29回年次大会発表論文集, p26

#### F. 健康危険情報

該当なし

- G. 研究発表
- 特になし
2. 実用新案登録
- 特になし
- H. 知的財産権の出願・登録状況
- 特になし
3. その他
- 特になし
1. 特許取得
- 特になし

Table 1 実習報告書における実習時の支援内容と課題点に関する記述事項の推移

受講者	行動問題予防の 先行子操作			行動問題の 対応			行動問題の対応に 関する課題点			適切行動の 先行子操作			適切行動の 対応			適切行動の支援に おける課題点		
G 1	A	1		1			2			9			0			0		
	B	0		2			0			3			0			0		
	C	0		3			0			4			0			0		
	D	0		4			0			5			1			0		
G 2	E	0		1			7			5			0			3		
	F	1		1			2			4			0			8		
	G	0		3			0			7			0			3		
G 3	H	1		3			0			8			1			4		
	I	2		3			1			9			1			4		
	J	0		1			2			5			0			1		
	K	0		5			0			5			0			4		
G 4	L	7		1			1			5			1			2		
	M	2		1			2			4			1			0		
	N	1		3			3			4			1			1		
	O	0		5			1			7			1			2		
平均		1.07		2.57			1.5			6.0			0.46			2.13		

Table 2 実習時の各グループの協力者の行動問題の生起、活動従事の様子

各グループ の協力者	活動従事 場面数	行動問題の 生起場面数	その他の様子・特記
1	5/5 場面	2 (水飲み、こだわり)	室内活動時に周囲の騒音が気になり、 不安定になることが見られた。
2	1/5 場面	3 (他害行動)	環境の変化に非常に敏感で、場所の 移動、新規場面で落ち着くことが困難。 活動従事自体がほとんど不可能。
3	13/13 場面	0	計画していた活動構成だと 時間があまり、急遽活動を変更したが、 不安定になることなく従事可能であった。
4	6/7 場面	4 (物投げ、破壊的行動)	課題道具を投げ捨ててしまい、 1活動中止せざるを得なかった。

研究成果の刊行に関する一覧表

## 書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
井上雅彦			家庭で無理なく楽しくできる生活・自立課題36	学研教育出版	東京	2011	
井上雅彦		井上雅彦 吉川徹 日詰正文 加藤香	発達障害の子どもをもつ親が行う親支援	学苑社	東京	2011	
井上雅彦	応用行動分析		はじめて働くあなたへ	(財)日本知的障害者福祉協会		2011	73
井上雅彦	ADHD/PDD合併の指導困難事例を通して一強い行動障害への支援システムを考える	小野次朗 小枝達也	ADHDの理解と援助	ミネルグア書房	京都市	2011	205-210
井上雅彦	解決の鍵を握る保護者との関係づくり	齊藤万比古	発達障害が引き起こす不登校へのケアーとサポート	学研教育出版	東京	2011	148-165
井上雅彦	発達障害のある子どもが集団のルールで動けるために	辻井正次	特別支援教育実践のコツ	金子書房	東京	2011	112-117
井上雅彦	家庭・社会生活のためのABA指導プログラム		Steps to Independence	明石書店	東京	2011	
辻井正次		辻井正次 (編)	特別支援教育実践のコツ：発達障害のある子の〈苦手〉を〈得意〉にする	金子書房	東京	2011-09	

杉山登志朗・辻井正次		監修 杉山登志朗・辻井正次, 协力 NPO法人アスペ・エルデの会	発達障害のある子どもができることを伸ばす! 学童編	日東書院	東京	2011-09	
杉山登志朗・辻井正次		監修 杉山登志朗・辻井正次, 协力 NPO法人アスペ・エルデの会	発達障害のある子どもができることを伸ばす! 幼児編	日東書院	東京	2011-09	
大塚晃	障害者自立支援法の改正について		特別支援教育	東洋館出版社		2011	
大塚晃	第4編 障害者福祉		国民の福祉の動向	厚生労働統計協会		2011	
大塚晃	他職種連携・ネットワーキング		障害者に対する支援と障害者自立支援制度	中央法規出版株式会社	東京	2011	
大塚晃	障害者権利条約をめぐる現状と課題		月刊福祉、現代の社会福祉100の論点	全国社会福祉協議会		2011	
安達潤	支援が必要な子どもへのトータルケアを目指した取り組み	辻井正次	特別支援教育実践のコツ	金子書房	東京	2011	180-187
安達潤	発達障害の基礎知識2(教育)	井上雅彦、吉川徹、日詰正文、加藤香	ペアレントメントセンター入門講座 発達障害の子どもをもつ親が行なう親支援	学苑社	東京	2011	34-35
安達潤	メンター活動の課題3. 教育の立場から	井上雅彦、吉川徹、日詰正文、加藤香	ペアレントメントセンター入門講座 発達障害の子どもをもつ親が行なう親支援	学苑社	東京	2011	116-118

### 雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
井上雅彦	家庭内で暴力をふるうアスペルガー障害の子どもへの支援	実践障害児教育	38(7) Vol 451	44-48.	2011

井上雅彦	家庭連携のスタートライン は実態把握と信頼構築	実践障害児教育	38(7) Vol 451	40-43.	2011
井上雅彦	学齢期から始める就労のための自己コントロールとコミュニケーション(4)	自閉症教育の実践研究	N020	64-65	2011
松尾里沙 金森純平 長谷由香 秦基子 井上雅彦	発達障害児のある中学生に対する小集団ソーシャルスキルトレーニングの効果	鳥取臨床心理研究		47-51	2011
井上雅彦	ストレスによる行動を理解し冷静な対応を心がける	実践障害児教育	38(12) vol 456	8-11.	2011
井上雅彦・岡田涼 野村和代・上田暁史・安達潤・辻井正次・大塚晃 市川宏伸	知的障害者入所更正施設利用者における強度行動障害とその問題行動の特性に関する分析	精神医学	53(7)	639-645	2011
井上雅彦	人間行動分析学への発展のために言語行動における理論行動分析の臨床場面への応用	行動分析学研究	26(1)	46-50.	2011
井上雅彦	将来の自立や社会生活のための一人ひとりに合わせたトップダウン型指導	実践障害児教育	39(5) vol 461	2-5	2011
井上雅彦	児童期の対応とペアレント・トレーニング	そだちの科学	17	48-52	2011
井上雅彦	行動分析学による自閉症療育におけるエビデンス	臨床心理学	67 . 12(1)	16-19	2011
井上雅彦	エビデンスに基づいた自閉症療育:応用行動分析学に基づくアプローチの成果と課題	小児の精神と神経	51(4)	323-327	2011

MASAHIKO IN OUE	Effectiveness of Group Parent Training for Mothers of Children with Developmental Disorders	6th International ABA Conference			2011-11
MASAHIKO IN OUE	Family support programs of ASD Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders	日米自閉症スペクトラム研究会議			2011-12
Suzuki K, Matsuzaki H, Iwata K, Kameno Y, Shimmura C, Kawai S, Yoshihara Y, Wakuda T, Takebayashi K, Takagai S, Matsumoto K, Tsuchiya KJ, Iwata Y, Nakamura K, <u>Tsujii M</u> , Sugiyama T,	Plasma cytokine profiles in subjects with high-functioning autism spectrum disorders.	PLoS One	2011; 6(5)	e20470	2011-05
Shimmura C, Suda S, Tsuchiya KJ, Hashimoto K, Ohno K, Matsuzaki H, Iwata K, Matsumoto K, Wakuda T, Kameno Y, Suzuki K, <u>Tsujii M</u> , Nakamura K, Takei N, Mori N	Alteration of plasma glutamate and glutamine levels in children with high-functioning autism.	PLoS One	2011; 6(10)	e25340	2011-10
Iwata K, Matsuzaki H, Miyachi T, Shimmura C, Suda S, Tsuchiya KJ, Matsumoto K, Suzuki K, Iwata Y, Nakamura K, <u>Tsujii M</u> , Sugiyama T, Sato K, Mori N	Investigation of the serum levels of anterior pituitary hormones in male children with autism.	Molecular Autism		2011, 2:16	2011-10

長峰 伸治・加藤 麻登佳・ <u>辻井 正次</u>	定型発達児・者との比較による高機能広汎性発達障害児・者の対人交渉方略の検討	聖隸クリストファー大学看護学部紀要	19	27-40	2011
明翫光宜・飯田 愛・森一晃・堀江 奈央・稻生慧・中 島俊思・ <u>辻井正次</u>	広汎性発達障害児を対象とした「気分は変えられる」プログラム作成の試み	小児の精神と神経	51(4)	377-385	2011
川上ちひろ・ <u>辻井 正次</u>	思春期広汎性発達障害男児への性教育プログラムの検討：試行的実践からの分析	小児保健研究	70(3)	402-411	2011-05
<u>辻井正次</u>	子どもたちの「できること」を伸ばす—発達障害のある子どものスキル・トレーニング実践(12・最終回)楽しい生活のために必要なこと	こころの科学,	157	116-121	2011-05
松岡弥玲・岡田 涼・谷伊織・大西 将史・中島俊思・ <u>辻井正次</u>	養育スタイル尺度の作成：発達的変化と ADHD 傾向との関連から	発達心理学研究	22(2)	179-188	2011-06
明翫光宜・望月知 世・内田裕之・ <u>辻井正次</u>	広汎性発達障害児の人物画研究(1)：DAM 項目による身体部位表現の分析	小児の精神と神経	51(2)	157-168	2011-06
井上雅彦・岡田 涼・野村和代・上 田暁史・安達 潤・ <u>辻井正次</u> ・ 大塚晃・市川宏伸	知的障害者入所更生施設利用者における強度行動障害とその問題行動の特性に関する分析	精神医学	53(7)	639-645	2011-07
<u>辻井正次</u>	発達障害のある子どもたちの家庭と学校(5)特別支援学級に在籍すること・通常学級に在籍すること	子どもの心と学校臨床	5	89-97	2011-08
宮地泰士・神谷美 里・野村香代・吉 橋由香・ <u>辻井正次</u>	広汎性発達障害児本人への診断説明(告知)に関する親の意識と実態調査	精神科治療学	26(11)	1465-1472	2011-11

辻井正次	発達障害への支援～ライフステージに応じて～青年期の支援(生活・就労支援)	第 52 回日本児童青年精神医学会総会抄録集		121	2011-11
辻井正次	成人期アスペルガー症候群の社会適応支援- ライフプランニング・スキルに関連して	第 107 回日本精神神経学会総会プログラム・抄録集		S. 338	2011-11
安達潤	地域での発達障害に対する一貫した支援のあり方について	児童青年精神医学とその近接領域	52(3)	280-288	2011
安達潤	P A R S 短縮版の作成と評定における観点	乳幼児医学・心理学研究	20(2)	83-88	2011

